

2018年12月23日 「飼葉桶と十字架」

「飼葉桶と十字架」

クリスマス、おめでとうございます。互いに挨拶を交わしましょう。今日という日を心から感謝しましょう。

今、私たちは喜んで挨拶を交しました。誰も暗い気もちで「メリークリスマス」と言われた方はいないと思います。私たちにとってクリスマスは喜びなのです。このことは私達にとりまして何の疑問もないことです。

しかし、イエスが誕生した時代、その誕生に対して、恐れと不安を感じている人達がありました。今日は、そのことを見ていきたいと思うのです。

私達は先週、イエス様の誕生と十字架についてお話ししましたが、まさしく、今日のお話しもそうなのです。

なぜなら、イエス様の誕生はイコール、十字架への道のりの始まりであったからです。もし、私たちが始まりを知るならば、その最期も知らなければなりません。この二つにイエス・キリストの生涯が凝縮されているのです。

実はイエス・キリストの「誕生」と「死」には共通点があるのですが、皆さん、何だかお分かりでしょうか。それは、そのどちらにも権力ある人間が関わっていたということです。

イエス様誕生の時、ヘロデ王がこのイエスのことを聞き、幼子を殺そうとしました（『ヘロデが幼な子を捜し出して殺そうとしている』 マタイ2章13節）。

イエス様が十字架にかかる時、総督ピラトはイエスの刑の判決に関わり、彼の最終的な判断によりイエス様は十字架に架けられました（『そこでピラトはバラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引き渡した』 マタイ27章26節）。

ヘロデにもピラトにも絶大な権力がありました。それは普通の人達には与えられていないものでした。大抵のことは彼らの思うようになりました。目障りな者がいれば、彼らの手の中でその命を握りつぶすことができました。

イエスの誕生と死には、このような人間の権力が関わっていたのです。しかし、そんな力を持っているこの二人は片やイエスの誕生に対して、片やイエスの十字架に対して、その心が揺れ動いていたのです。

神の一人子が生まれる時に、ヘロデの心にあったものは何でしょうか。それは「不安」でした。彼は「ユダヤのベツレヘムにユダヤ人の王が生まれる」ということを聞き「不安」（マタイ2章3節）を感じたと聖書は記しています。

なぜ、私達は「不安」を感じる時があるのでしょうか。不安はいつもあるものと同居しているのをご存知ですか？それは「恐れ」です。私達は今朝、イエス様の誕生を喜んでいのに、その誕生を恐れている人がいたのです。

しかし、あらためて考えてみましょう。ヘロデが恐れたのは、飼葉に寝かされている何の力もない幼子でした。どうしてそんな赤子を恐れる必要がありますか。クリブでスヤスヤと眠っている赤ちゃんを恐れる人がいようか。ベビー用品を売っている店は恐ろしい所と言う人がいるだろうか。いいや、人は顔に笑みを浮かべながら幼子を覗き込み、小さな小さなベビー用品を手にするものだ。

赤子イエスは当然、この時に一言もヘロデに何かを語っていません。しかし、彼はこの赤子が将来、自分の地位をおびやかすのではないかと思ったのです。言い方を変えればイエスがいて自分が願っていること、自分がしたいことが、このイエスによってできなくなるとイエスを恐れたのです。彼は自由を失うのではないかと恐れたのです。

私達はヘロデを非難するかもしれませんが、幼子を恐れるとは、なんと自分の地位に縛られた哀れな人間なのかと。

しかし、実はこのヘロデの心は私達と無関係ではないのです。彼の心は私達の罪の本質を明らかにしています。罪とは手錠がかけられるとか、自分には罪がないだろうと自己判断で決めるものではありません。

罪とは神と自分が関わるのなら、自分は思い通りに生きられなくなるのではないかと恐れ、神に近づかないことなのです。

ヘロデの恐れはまさしくそのことでした。彼は自分の思い通りに権力を振り回せなくなるかもしれないことを恐れたのです。しかし、皮肉なことに彼はその自分の権力を振り回すことにより、みじめな生涯を送った人となりました。

主にある皆さん、私は仕事柄、多くの方達の人生に関わることがあります。そんなことを続けていると、本当にこのことがよく分かってきました。私達は自分の自由を失うと恐れ、神から離れることにより、実はますます自由を失っているということです。

2018年12月23日 「飼葉桶と十字架」

そして、そのために、いたるところで「自由」の名のもとに、自分の思い通りに生きようとしてる人がいます。私達は「自由」が大好きですから！しかし、私は証言しなければなりません。その「自由」が実のところ、なんと私達をがんじがらめにして、私達を「不自由な人間」としていることかと・・・。

イエス・キリストはそのような不自由な生き方から私達を解放するために来られたのです。イエス様はかつて言われたではないですか。『もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう』（ヨハネによる福音書8章31節－32節）

パウロはこのイエス・キリストについて言っているではありませんか。『自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放してくださったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきにつながってはならない』（ガラテヤ5章1節）

今日はルイス君と礼花さんが洗礼を受けます。このような若者が主のもとに来ることはなんとさいわいでしょう。彼らの人生はこれからです。ある意味、まさしく彼らの前途は彼らの自由な采配のもとにあるのです。

クリスチャンになることにより、彼らの人生が今日から自由を失う日々となるのではありません。彼らは神の前に本当の意味でその一度限りの人生において、本当の自由を謳歌し、その人生を歩むのです。

神の一人子が十字架にかかるか否かという時に、総督ピラトの心にあったものは何だったのでしょか。聖書によるとピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした（マルコ15章15節）と思って、イエスを十字架へと引き渡しました。

その判決に対して最終的な力を持っていたピラトは、どこに真理があるのかということではなくて、群衆とのバランスでイエスを見ていました。そこには彼の面子と保身がありました。

しかし、イエス様はその時、裸に近い状態でムチ打たれ、罵られ、唾をかけられ、そのどこにも保身も面子もありませんでした。神の子である彼が自らの身を守ることは簡単なことです。

イエス自身が言ったように「天の軍勢」を来させ、彼の身に何人も指一本触れさせないようにすることがイエスにはできました。そして、それらの天の軍勢に守られて地をおさめることにより、面子を保つことも簡単なことでした。しかし、それらの権威をこの時のイエスは何もお使いになりませんでした。

私達は人の顔色、人にどう思われているかを過剰に恐れます。言うなれば、私達は人を恐れるのです。そして、そこから私達の人生は不協和音を生じ始めます。

ピラトの前に立つイエスの肉体はぼろぼろでした。まさしく、イザヤが預言したように、そこに何の威厳もありませんでした。しかし、この時、ピラトとイエスは対照的でした。すなわち、そこには人を恐れないイエスがあり、ピラトは人の顔色をうかがっていたのです。

時に私達は人にどう思われているのかということの方が、イエス・キリストよりも大切なのです。人にどう思われているのかということに生きるのなら、私達は本当の意味で自分の人生を生き切ったとは言えないことでしょう。そして、それを私達は「私の生きた人生」と言うことができるのでしょうか。

主にある皆さん、ヘロデの生き方、ピラトの生き方には問題がありました。私達はそこから学ばなければなりません。私達も同じ轍（てつ）を踏まないためです。

今日、クリスマスとその名が全てを物語っているのに、その名を呼ばない風潮がこの国では蔓延しています。「シーズズ・グリーティング」なのです。あたかもその心はこのヘロデの心に結びついていきそうです。「イエス・キリスト、そんな存在が俺の人生に入ってきたら、俺は自由に生きられなくなるではないか」。とんでもない！そのことゆえに、私達は自由を失っているのです。

今日、人はフェイスブックで何人の友達がいて、その人達がどれだけ「いいね」を押してくれるのか、そんなことで自分がどれだけ価値あるのかと知ろうとしています。私達は既に知っているはずです。そんなはずはないだろうと！しかし、このことはそのままピラトの心につながっていませんか。

飼い葉に寝かせるイエスは私達に恐怖を抱かせるような姿ではないのです。十字架にはりつけにされたイエスは文字通り、何も持たない傷ついたお方です。本来、このお方の前に立つ私達は何も恐れる必要はないし、人の目を気にすることはないのです。

私達はこのお方に近づきましょう。一度の人生、本当に畏れるべきものを恐れかきこみつつ、しかし、本来、全く恐れる必要のないものに人生の主導権を握らせることなく、本当の自由を得て、この人生を歩んでいこうではありませんか。

それがクリスマスのメッセージであり、イエスの生涯のメッセージなのです。

お祈りしましょう。